九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

”元代文学”の範疇について

奥野, 新太郎
九州大学人文科学研究院 : 助教

https://doi.org/10.15017/1650646

出版情報：中国文学論集. 44, pp.130-145, 2015-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

中国文学論集　第四十四号

〝元代文学〟の範疇について

奥野　新太郎

一　はじめに

いわゆる「中国史」とは、チャイナ・プロパーにおける王朝交替の繰り返しとして認識され、かつ叙述や研究の際の時代区分についても、王朝をそのまま歴史段階を区切る指標として用いることが多い（以下、王朝区分と呼ぶ）。だが周知のように、チャイナ・プロパーにおける王朝交替は決して単線的に展開したものではないため（正統論によれば単線的だが）、〝史〟における時間的先後関係を示す時代区分の指標としては問題がある。また王朝区分は一国史としての中国史なるものの存在も前提としているが、そもそもこの一国史としての中国史という概念自体も再検討される必要がある。

中国文学史も中国史の亜種たることを指向する以上[1]、叙述や研究に際してやはり時代区分が用いられるが、その際にも王朝区分が用いられることが多い。然るにそこにも中国史と同様の問題が指摘できるわけだが、しかし、一方ではかの「凡一代有一代之文学」（王国維『宋元戯曲史』）の言に象徴されるように、文学の変遷を王朝交替と連動させて捉える見方が古来より存在することも事実である。加えて、時間的先後関係のみならず、文学群を分類する範疇（カテゴリー）としても、古来より王朝が用いられていることも見逃せない。そして現在も、漢代文学、六朝文学、宋代文学、元代文学、明代文学などのように、文学研究及び文学史において、王朝区分による文学群の分類、或いは変遷の叙述が通行している。

これらは中国文学研究における言わば「枠組み」であり、外的かつ便宜的なものに過ぎず、従って、そこに指摘される問題も実際の個別研究にはさほど影響を及ぼすものではないとする向きもあるかもしれない。だが、部分と全体との関係は常に循環的なものである。個別研究も基本的にはある特定の枠組みの中に展開され、位置付けられるものであり、さらには、そこでの問いや解釈そのものが、その特定の枠組みの存在を前提として立てられ、なされることも少なくない。然るに、枠組みに揺らぎが生じるとすれば、個別研究にも影響を与えないわけにはいかない。現状として王朝区分という枠組みが用いられ、かつそこに問題が指摘できる以上、その枠組みそのものに関する検討も必要となる。

かかる問題意識のもと、本稿では文学史や文学研究において通行している王朝区分について、「元代文学」という範疇を例として、その妥当性の検討と問題の顕在化を試みる。「元代文学」を取り挙げる理由は、これがこれまで述べた王朝区分の問題が最も顕在化するカテゴリーであることによる。(2)

二　文学史における王朝区分の通行とその問題

いわゆる時代区分論とは、西洋の歴史学に淵源する歴史把握の方法である。それは発展史観や唯物史観など、ある種の歴史観やイデオロギーに基づく目的論的なものであることが多い。それはやがて中国史にも導入され、「上古」「古代」「中世」「近世」「近代」などを以て歴史を区分する試みがなされてきたが、かつて宮崎市定が「いずれもみな西洋方式を丸呑みしたものに外ならぬ」(3)と指摘したように、中国の歴史に適応できるか否かについては、長らく議論の対象となっている。だが岸本美緒が指摘するように、時代区分論に関する議論は近年はさほど盛んではないようである。(4)岸本によれば、その原因は「「時代区分とは何をすることか」ということについての共通認識」という前提がくずれてきたためで、「現在の研究者が直面しているのは、「そもそも時代区分とは何か」「時代区分はいかにして可能なのか」という、より根源的な問いであるように感じられる」と言う。また岸本が時代区分に関する「「古代」「中世」「近代」などの語が単なる便宜的な呼称ではなく、明確な意味内容を持つ概念である」と指摘する

のも注意される。中国文学史における王朝区分も、必ずしも便宜的な呼称にとどまるものではなく、そこに何らかの意味内容が想定されている場合が少なくないからである。例えば古文辞派が詩の模範として盛唐詩を挙げるとき、この盛唐は、盛唐時期という時間的な範囲のみならず、文学としてのある一定の質や水準、傾向を具えた作品群を意味する限定語として、意味内容を有することになる。そうなると、王朝区分とはもはや便宜的では済まなくなるだろう。それはもはや一つの概念としての意味を有している。中国文学史における時代区分とは、現在通行する王朝区分も含めて、改めて検討されねばならない重要な問題であると言ってよい。

さて、現在、国内外の中国文学史の論著においては王朝区分による叙述が通行しているわけだが[5]、その理由はまず第一に、游国恩等『中国文学史』に「厳密に科学的な区分ではないものの、我々が我が国の文学の発展を理解する上で有用である」と述べられるように[6]、問題無しとは言えないが、現状では最も妥当であるとするものである。これは言わば消極的採用と言ってよいだろう。董乃斌も「関於文学史類型的思考」にて次のように述べる。

断代史は通史を截断したものであり、中国文学史について言えば、最も便利な截断方法は、各王朝の起点と終点によるものである。……通史と断代史は根本的にはどちらも時間の原則に従って形成された文学史の類型であり、二者は本質的には違いは無い。……断代史の存在する理由は、歴史というものが自然な区切りを本来的に有するからであり、王朝の盛衰・交替とは、後世の目から見れば、最も自然にして、最も穏当な区切りであり時間の区分である。中国文学史の断代史は王朝ごとに配列するものが最も多いが、それは問題こそ確かにあるものの、客観的な理由があるのである[7]。

董乃斌は、断代史とは通史を截断したものとし、かつ問題は確かにあるとはしながらも、截断の基準に王朝を用いることの妥当性を指摘する。だがそれを「自然な区切り」と言い、それ以上の理由を挙げえていない以上、やはり消極的な採用と言ってよい。

いっぽう、かかる現状に対する問題意識も提出されている。例えば井上泰山は次のように指摘する。

言うまでもなく、過去に積み重ねられた遺産を未来に生かすことは、後学にとって当然の使命であるが、一方で、日本に於ける中国文学史編纂の過程を俯瞰してみると、そこには不安材料がないわけではない。それは、

文学史の区分法に関して大きな問題をかかえているからである。明治期およびそれ以降に編纂された多くの中国文学史は、一様に、王朝の交替を以てそれをそのまま文学史上の区切りとしている。「漢文唐詩宋詞元曲」といった言葉に代表されるように、一代の王朝の変化が、そのまま文学の変化と連動しているかのような錯覚が、未だに横行しているのである。[8]

井上が指摘するのは、王朝交替と文学の演変とは本当に連動するのかどうかという問題である。[9] 王朝交替――すなわち統治者集団の交替が、どれほど社会や文化、芸術活動に影響を与えうるのか。もちろん、それは当時の社会に少なからず影響や変化をもたらしうるものではあるが、だからと言って、王朝が交替すると直ちに社会や文化の全てが変化するはずがないこともまた言うまでも無い。こと文学を含む精神活動や芸術活動に関しては、王朝が交替したからといって、すぐさまそれに連動して大きく変化するとは想像し難い。仮に王朝交替によって文学もある種別物に変化してしまうのであれば、例えば「唐宋文学」や「明清文学」のような、王朝を越えた括りは成り立たないことになる。このように、中国文学史における王朝区分の通行とその問題点については、多くの研究者に認識されるところではあるが、しかし依然として王朝区分は用いられ続けている。

さらに、王朝区分を用いることのもう一つの問題として、王朝とは、時間的な起点と終点と、そして特定の空間的な領域を有することも挙げられる。後者については後述するが、前者について、例えば仮に「唐代」「宋代」などの語をある時点を示す意図のもとで用いるとき、その「唐代」「宋代」という王朝区分の語は、使用者の意図にかかわらず、その王朝が存在した時間的範囲をも不可避的に示してしまう。然るに、王朝を用いた「〇代」という言い方は、純粋に時点を示す語として用いることが困難なのである。しかし我々は、かかる謂いを時点を示す語として無批判に使ってはいないだろうか。

また、王朝区分については、現代の研究者のみならず、そもそも中国の文学史的言説において古来より用いられ続けてきた伝統的なものであるとする見方もあるだろう。事実、例えば、

八音与政通、而文章与時高下。三代之文、至戦国而病、渉秦漢復起。漢之文、至列国而病、唐興復起。夫政龐而土裂、三光五岳之気分、大音不完。故必混一而後振。

八音は政と通じ、文章は時と与に高下す。三代の文、戦国に至りて病み、秦漢に渉りて復た起つ。漢の文、列国に至りて病み、唐興りて復た起つ。夫れ政龐(みだ)れて土裂ければ、三光五岳の気分かれ、大〔太〕音(おんまつた)完からず。故に必ず混一して後に振うなり。

（劉禹錫「唐故尚書礼部員外郎柳君集紀」[10]）

この文では、文学とは時代とともに隆盛、衰退するものであるとし、かつそれが王朝区分を用いて叙述されている。このように、古来より多くなされてきた文学史的言説には確かに王朝区分が多く用いられており、然るに、中国文学史における王朝区分とは一定の伝統を有しており、井上が「錯覚」と言うほど根拠の無いものではなさそうにも見える。しかし、中国では清末に至るまで、正朔に代わる通算的な紀年法が存在せず、歴史というものを時間的に区切る単位として、元号、皇帝、王朝のいずれかしか無かったことを考えると[11]、通算的な紀年法を手に入れるまで、文学史の整理に王朝区分を用いることは、或いはほかに手段が無かったがゆえのものと見ることもできる。つまり、伝統的に用いられ続けてきたということは、王朝区分の妥当性を示す積極的要因とは成り難いと言わざるを得ず、やはり文学史における王朝区分とは、批判的検討を加えられて然るべきものなのである。

三　「元代」は「中国史」か

「元代文学」の指す範疇について考える上で、王朝区分に関する問題とは別に、もう一つ検討すべき問題がある。それは、果たして「元代」とは「中国史」の一部として見なしてよいのかというものである。冒頭に述べたように、王朝区分による中国史の時代区分或いは中国史の認識には、一国史としての中国史というものが前提されており、例えば董乃斌の「断代史は通史を截断したもの」という言葉も、単線的な王朝交替による一国史としての中国史を前提としたものであると考えられる。つまり、王朝ごとの断代史を単線的に繋げれば、一つの直線的な一国史＝通史ができあがるというわけである。しかし、こと「元代」に関する限り、かかる見方は問題無しとは言い切れない。

まず確認しておかなければならないことは、遼、宋、金、元、明という、「元代」およびその前後の時期に関する「中国史」上の王朝は、決して単線的、直線的な交替ではないということである。

遼　九〇七～一一二五年
宋　九六〇～一二七六年
金　一一一五～一二三四年
蒙元[12]　一二〇六～一三八八年
明　一三六八～一六四四年

一見して明らかなように、これらの王朝はそれぞれ重複する時期を有している。そして、例えば金と宋、モンゴルと宋が同時に存在している時期については、我々は同一時期を或いは「金代」と呼び、或いは「宋代」と呼び、或いは「元代」と呼んでいる。この時、王朝とは建国から滅亡に至る時間的な限定に加えて、領土という空間的な限定をも有することが忘却されていることがままある。例えば西暦一二〇〇年という時点を、金を研究する場合には「金代」と呼び、宋を研究する場合には「宋代」と呼ぶだろうが、これは実際には、それぞれ「金統治下」「宋統治下」という空間的限定のもとでのみ成立する時期呼称であり、いわゆるチャイナ・プロパーの歴史――「中国史」の時期呼称としては十全に機能しえないことは明白であろう。空間的限定を加えない限り、この「金代」と「宋代」は衝突する。この時点で、まずこれらの王朝は時間的先後関係を示す指標として無批判に用いることはできない。

さらに、これらのうち遼、金、蒙元はいわゆる非漢族王朝である。これら非漢族王朝を中国史の中に位置付けることについても議論がある。例えば遼について、黄震雲『遼代文学史』が遼代文学は「中華民族の重要な構成要素であり、中華文明史上において充分に重要な役割を果たしている（是中華民族的重要組成部分、在中華文明史上発揮過十分重要的作用[13]）」と述べ、遼を中国史の中に組み込んで捉えるいっぽう、遼朝史研究者の島田正郎は、「国の体制が整えられるにつれて、中国王朝の体制に近づきつつあることは否定できまい[14]」と述べ、遼が中国式の制度を採用したことは事実として認めつつも、しかしやはり国の根幹においては契丹固有の性質を保持していたことを重視し、「この国の法や制度、とりわけ政教の拠り所を固有の民族祭に求め、なかでその進行をシャマン出身の国の「巫」にゆだね、意識的に「郊祀」を排撃したこの国を、中国王朝の系列のなかに置くことが、果たして許されるであろうか[15]」と、遼を中国王朝の一つとして位置付けることに異議を呈している。島田によれば、遼とは「北方アジ

ア史の一齣」として理解するべきだという。[16] また蒙元についても、宮脇淳子は、

元朝は、中国歴代王朝の一つに数えられ、中国史の一部として研究されているが、実際には、これまで見てきたような遊牧帝国の伝統を大いに受けついでいる。政府の機関の名前に、中書省・枢密院・御史台・尚書省というような、伝統的な中国の官職名が使用されているからといって、他の中国王朝の同じ名前の機関と同じ役割を果たしたと早のみこみをしてしまうと、元朝の政治史を理解することは不可能になる。[17]

と述べ、やはり蒙元を中国史の一環として見ることの危険性を指摘する。実際に、歴史学においては蒙元を中国王朝としてではなく、中国王朝史の外部にある遊牧国家として見なすものも少なくない。例えば岡田英弘も、

中央ユーラシア草原では六世紀以来、第一次・第二次トルコ帝国、ウイグル帝国、契丹（遼）帝国、金帝国、モンゴル帝国と、一連の遊牧帝国の系列が成長を続け、とうとう十三世紀に至って、隋・唐の系列を継ぐシナの名残りとも言える南宋帝国を、完全に呑み込んでしまったのである。[18]

と述べ、遼、金、モンゴルを中央ユーラシア草原の遊牧王朝と位置付け、これらを中国史の外部に置いている。

このように、非漢族王朝の研究においては、これらを「中国史の一環」として捉えること自体が問題視されており、かつ実際に中国史の外の王朝として捉える研究が少なくない。[19] 歴史学では王朝というもの自体が重要な研究対象の一つであるから、王朝をどのように捉え、どのように歴史の中に位置付けるかが重要な問題となるのは当然である。ゆえに王朝という単位は考察対象として重要な意味を持つ。だが文学研究、文学史研究においては、例えばしばしば主張されるような「文学は文学それ自身の法則によって変遷するものだ」とする立場に立てば、王朝という単位は必ずしも区分の指標や枠組み、範疇として決定的な意味を持つものではない。

また王朝交替には常に正統論がつきまとう。例えば宮脇前掲書に次のように言う。

中国の正史では、司馬遷の『史記』以来、皇帝が天下を統治する天命の伝わる正統を記述するのが歴史だということになっている。正統が二つ並立してはならないから、中国史のたてまえとしては、南宋皇室の裔が滅んだ一二七九年からが元朝ということになる。その一方『元史』では、一二七一年にフビライが「大元」という漢式の称号を採用する前のモンゴル帝国を叙述する時でも、たとえばチンギス・ハーンを元の太祖、……モン

ケを元の憲宗と記す。……そもそも、世祖という廟号を持つフビライが元朝の実際の創始者で、それ以前を元と呼ぶのは時代錯誤である。このどちらの立場も極端なたてまえであって、史実でないことはいうまでもない。[20]宋元明清という言い方に象徴されるように、一般に、「元代」とは「宋代」の終わりとともに始まるものとして配置されることが多い。だがそれは宮脇が指摘するように、宋から元へと一つの正統が継承されるとする正統論によるものであり、必ずしも実際に即したものではない。そして、このことを最も象徴するのが、「元とは百年にも満たない短命王朝であった」という常套句である。この「百年にも満たない」とは、明らかに宋滅亡及び明建国を起点と終点として数えた結果であり、試みにチンギスからトクズ・テムルまでを数えると、蒙元の寿命は一八二年間となり、北宋（一六八年間）や南宋（一五〇年間）よりも長いのである。つまり、チンギス以来の遊牧国家として見るか、宋の後継たる中国王朝の一つとして見るか、「元代」とは、論者の立場によってその指す内容を変えてしまう、実に曖昧な言葉と言わざるをえないのである。

四　「元代文学」の定義についての検討

「元代文学」という語は、実際にはどのような定義のもと使われているのだろうか。「元代文学」を総合的に論じる場合、その論著の冒頭に各著者による「元代文学」の定義がしばしば明示される。例えば鄧紹基は『元代文学史』にて次のように言う。

> 種々の原因から、元王朝が中国を統治した時間は長くない。モンゴル王朝が金を滅ぼし、北方を統一した時点から、恵宗トゴン・テムルの至正二八年（一三六八）、明兵が大都を攻め落とし、元の皇室が北方へ帰り、統一国としての元王朝が滅亡した時点までを数えると、一三四年になり、世祖クビライの至元一三年（一二七六）に元軍が臨安を占領し、宋室が投降し、元王朝が全国を統一した時点から数えると、わずか九二年になる。文学の発展という実際の状況を踏まえると、元代文学史の起点と終点は、モンゴルが金を滅ぼしてから統一国としての元朝が滅びるまでと見てよいだろう。[21]

先に触れた「元代」の指す範囲がここでも言及され、かつ該書は「元代文学」を金の滅亡から始まるとする。これは概ね作品の残存状況によるものだが、「元代文学」の起点を金の滅亡、より具体的に言えば耶律楚材（一二二一～八五）や元好問（一一九〇～一二五七）に求める見方は極めて多い。例えば羅斯寧・彭玉平の『宋遼金元文学史』でも、「通常の意味での元代文学とは、主に西暦一二三四年にオゴデイが北方を統一してから元朝の滅亡までであり、年数は約一三〇年余りに及ぶ（通常意義上的元代文学、主要是従公元１２３４年窩闊台統一北方到元代滅亡為止、時間跨度約１３０多年[22]）」とあり、やはり金滅亡を起点とする。そしてかかる見方は伝統的な観点でもある。例えば『元詩選』を編纂した顧嗣立は次のように述べる。

元詩承宋金之季、西北倡自元遺山好問、而郝陵川経・劉静修因之徒継之、至中統・至元而大盛。然麤豪之習、時所不免。東南倡自趙松雪孟頫、而袁清容桷・鄧善之文原・貢雲林奎輩従而和之、時際承平、尽洗宋金余習、而詩学為之一変。[23]　＊小字は原注

元詩は宋金の季を承け、西北は元遺山好問より倡え、郝陵川経・劉静修因の徒之れに継ぎ、中統・至元に至りて大いに盛んなり。然れども麤豪の習、時として免れざる所なり。東南は趙松雪孟頫より倡え、袁清容桷・鄧善之文原・貢雲林奎の輩従いて之れに和し、時承平に際い、尽く宋金の余習を洗ぎ、而して詩学之れが為に一変す。

ここで顧嗣立は元詩の起点をそれぞれ「西北」と「東南」の二つに求めている。ここでは「西北」とは旧金朝領、「東南」とは旧南宋領を指す。また、「時承平に際い」とは、南宋滅亡にともなう南北統一を指す。つまり顧嗣立の論によれば、元詩には北方の起点と南方の起点と、二つの起点が存在することになる。これは詩のみに限定した議論であるが、現代の研究者が元代文学の起点を金滅亡後に設定するのは、基本的にこの顧嗣立の説の延長線上にあると言ってよい。そして、さらにここから見えてくるのは、「元代文学」という範疇とは、その内部に南北という補助線が引かれており、論者は常にこの補助線に従って南北に分けて、「元代文学」、引いては「元代」という時期を重層的に見ているということである。そしてその補助線は一二七六年、南宋滅亡を以て消え、分裂も解消され、以後の「元代文学」は南北統一という情況の中で展開することになる。要するに、我々が「元代文学」という一語を以て括っているものは、南北という領域区分とそれにともなう二つの起点、さらに南北統一前と統一後という二つ

の段階と、およそ一つのカテゴリーとして括るにはやや錯綜した構造を有していると言える。

さらに、蒙元が非漢族王朝という点もいまいちど考慮せねばならない。言うまでも無く、文学研究の対象である文学とは、言語によって構成される。然るに、中国文学とは国民文学の一つとしての謂いであり、そこで研究の対象とされるのは、自ずと中国の伝統的書記言語である漢語によって構成された文学となる。むろん「元代文学」の研究においても、その対象は漢語によるものとなっている。だが周知のように、非漢族王朝であるモンゴルは決して漢語一辺倒の王朝ではない。宮紀子が、

モンゴル時代の言語を、漢語中心に捉えようとすること自体、無理な話なのである。ウイグル貴族のセチウル（薛趙吾）、セヴィンチュ・カヤ（貫雲石）をはじめ、ダルガ（チ）であったムスリムのマスウード（馬速忽）、ビラ（必剌）などは、さまざまな書籍の出版に際し、雅文漢文によって、しかも見事な筆跡で序文をよせることができた。……ぎゃくにいわゆる漢人、南人にしても、モンゴル語を話せる者は、カアン直属、諸王以下のケシク、集賢院や翰林院の学士、各路に設けられた蒙古学の学生はもとより、いくらでもいた。……そもそも、大元ウルス治下では、いかなる人種であろうとも、官職に就くならば、何語がしゃべれるか、ウイグル文字、パクパ字、漢字がよめるかどうか、がチェックされた。[24]

と指摘するように、モンゴル統治下のチャイナ・プロパーは多言語・多文字が入り乱れる世界であった。当時の漢語を使う人々も当然このことは把握している。例えば呉澄（一二四九～一三三三）「送杜教授北帰序」に、

皇元興自漠北、……得異人制国字、假形体、別音声、俾四方万里之人、因目学以済耳学之所不及、而其制字之法則与古異。古之字主於形、今之字主於声。

皇元は漠北より興り、……異人を得て国字を制らしめ、形体に假り、音声を別ち、四方万里の人をして、目学に因りて以て耳学の及ばざる所を済う。而るに其の制字の法は則ち古えと異なる。古えの字は形を主とし、今の字は声を主とす。

（『呉文正公集』巻一四）

と述べる。ここに言う「今の字」とは、クビライがチベット僧パクパに作らせた表音文字であるパクパ文字である。呉澄は旧南宋人であり、当時を代表する知識人の一人であるが、宋滅亡後、中央へ召された経験を持つ彼は、モン

ゴル帝国の多言語・多文字状況は熟知していた。旧南宋出身の漢語使用者にとっても、モンゴル統治下の多言語・多文字状況は身近なものであった。かかる言語・文字の状況を踏まえると、我々が「元代文学」と言うとき、そこには対象言語についても何らかの限定や言及が必要になってくると思われるが、従来の「元代文学」の定義において、このことはふつう考慮されていない。[25] 実際の文献の残存状況はひとまず措き、「元代文学」には、理論上は当時用いられていた全ての言語が対象として含まれるはずだが、実状としては「漢語による」という暗黙の限定語が付加されている。

これらをまとめると、「元代文学」という範疇は、まず「元代」という語の指す範囲が曖昧かつ可変的であり、その中身も南北の別、統一未統一の別、複数の起点を持つなどの錯綜した構造、さらに名称として言語や文字など当時の状況を必ずしも踏まえ切れていない実状と、多くの問題を持つものであることがわかる。これらを解消するためには、現在「元代文学」と呼ばれているものを、或いは解体、再編するか、或いは一三～一四世紀のモンゴル統治下の漢語文学などのように、より実際に即した新たな範疇の呼称を模索するなどの必要があるだろう。

「元代文学」とは何かを考えるためには、各個別研究を積み重ねた上で、その総体として結ばれる像にその答えを求める必要があることは言うまでも無い。だが、個と全とは循環的なものである。個別研究を積み重ねると同時に、現在仮定的に用いられている「元代文学」という範疇そのものについても、その妥当性の有無も含めて検討を重ねていかなければならない。そして、これまで述べたように王朝区分としての「元代文学」という区分が問題を有するとすれば、それは最終的には文学史における王朝区分の妥当性の吟味へも繋がっていく。「元代文学」に限らず、中国文学史における王朝区分とは、その妥当性、それに代わる区分法の模索など、いまいちど議論されなければならないだろう。

五　王朝区分からの脱却を求めて

さて、本稿で述べてきた「元代文学」の範疇についての問題は、ひとえに文学或いは文学史を区分する単位とし

て王朝を用いることに由来する。然るに、その解決を目指す上では、王朝区分からの脱却がその手段の一つとして求められる。では、かかる王朝区分からの脱却を求めることは、「元代文学」を研究する上でどのような意義を有するのだろうか。最後にこのことについて私見を述べたい。

我々は王朝区分を用いることで、自ずとその視野をも狭めてしまう。かつて古松崇志は「従来、金国治下の華北と南宋治下の江南の間に横たわる国家間の断絶が過度に強調されがちであったが、実際には国境を越えた文化交流が予想以上に盛んだったようであり、特に十三世紀に入ってからそれは顕著である」と指摘したが[26]、「過度に強調され」た理由の一つに、王朝ごとに区分された一王朝研究という、我々の研究領域の在り方が考えられる。宋研究は宋国内、金研究は金国内に、その研究の視線を限定してしまうと、国境を越えたところに問題提起を見出しにくくなり、また対象の特殊性を見出そうとするあまり、他者との差異の方により着目してしまい、そうすると、越境的な現象や彼此に共時的に展開する現象への注意が疎かになる可能性がある。しかし、観察者による区分とは異なり、対象自身は必ずしもその区分に従うわけではない。例えば筆者も以前指摘したように、この宋金元という三王朝については、王朝よりも、むしろ南北という枠組みを以て眺めることで、これまで必ずしも注意されていなかった文学現象や問題を見出すことができる[27]。そして、胡伝志が宋金対立時期を「宋代」でも「金代」でもなく、「第二次南北朝時期」と呼んだように[28]、この時期の文学を考える上では、王朝よりも南北という枠組みの方が、より有効であると考えられる。先に見たように、遼金—宋という実際の王朝対立時期のみならず、「元代文学」と呼ばれる範疇においても南北という補助線が引かれていた。また当時の文人の言説にも、南北及び南北統一というものがキーワードとして見出される。

これまで述べてきたように、かくも問題の多い「元代文学」というカテゴリーは、五代以来の分裂状態からモンゴルによる統一に到る「南北時期」として、遼宋金も含むより緩やかな括りを以て眺めることで、王朝区分のもたらす弊害を解消し、王朝という枠組みにとらわれることもない新たな研究の視界が開かれるのではないだろうか。

注

（1）無論、文学史が真に〝史〟たりうるかどうかは、別に議論すべき問題である。

（2）なお、かくいう筆者自身もこれまで「元代文学」という語を無批判に用いてきた者の一人である。然るに、本稿で指摘される問題点や批判は、筆者自身に向けられたものでもある。

（3）宮崎市定『中国史（上）』（岩波文庫版、二〇一五年＊原著は一九七七～八年、岩波書店刊）総論2「時代区分論」に「以上紹介した日本の時代区分はそのいずれもが三分法、すなわち古代、中世、近世の三期に区分する方法を採っていることは注意さるべきである。……それはやはり西洋に古くから行われている三分法をそのまま採用したがために外ならない。……言いかえれば日本に行われた三種の時代区分は、自覚するとせざるとにかかわらず、いずれもみな西洋方式を丸呑みにしたものに外ならぬのである」（五〇～五一頁）と。

（4）岸本美緒「時代区分論」（『岩波講座　世界歴史1』収、岩波書店、一九九八年）。

（5）中国文学史の著作の中には、古代、中世、近世など、王朝区分によらない時代区分を用いて叙述するものもある。だがこの区分法自体は宮崎の指摘する「西洋方式を丸呑みしたもの」であり、さらにかかる時代区分を採用しつつも、その下位区分においては、やはり王朝という単位が用いられている――言い換えれば、王朝区分にさらに古代、中世、近世などによる上位区分を加えたものになっていることが多い。畢竟、王朝区分を用いない文学史の叙述はほぼ皆無であると言ってよい。

（6）游国恩等［主編］『中国文学史（修訂本）』（人民文学出版社、二〇〇二年第二版）「説明」に「我が国の長きにわたる封建社会の発展のなかで、封建王朝の交替は、往々にして長い階級闘争の自然の区切りであり、それは多かれ少なかれ社会経済や文化に若干の新たな局面をもたらした。それは文学の発展に対しても制約を与え、一時代の文学の様相に影響を与えた。ゆえに、主要な封建王朝を時代区分の指標とすることは、厳密に科学的な区分ではないものの、我々が我が国の文学の発展を理解する上で有用であり、ゆえに我々は［本書で］この方法を採用する（在我国封建社会漫長的発展中，封建王朝的更替，往往是長期階級闘争的自然段落，它或多或少為社会経済和文化的発展帯来了若干新的特点，它也対文学的発展起制約作用，影響着一箇時代的文学風貌。因此，尽管以主要封建王朝作為分期標誌，不

是厳格的科学劃分，但它也有助於我們掌握我国文学的発展，我們還是採用了這種辦法)」(二頁) と。

(7) 梅新林・黄霖・胡明・章培恒［主編］『中国文学古今演変研究論集三編』収、上海古籍出版社、二〇一〇年。原文は「断代史由通史截断而成，対於中国文学史而言，最方便的截断辦法，是按各王朝的起訖，……通史和断代史従根本上都是按時間原則形成的文学史類型，二者本質無異。……断代史存在的理由則是歴史本来就有着自然的段落，而王朝的興衰更替従後人眼中看去，就是一種最自然、也最無可争議的段落和時間劃分。中国文学史的断代史以按朝代分列的最多，是有其客観理由的，尽管弊病也很明顕。」

(8) 井上泰山「日本に於ける中国文学史編纂の歴史〜I明治期〜」(『関西大学東西学術研究所紀要』四六、二〇一三年)。

(9) なお井上はかかる問題意識のもとに、王朝区分からの脱却を目指した画期的な文学史の著作として章培恒・駱玉明主編『中国文学史新著』を挙げる。該書は全編を通じて中国文学史を「上古文学」「中世文学」「近世文学」と区分し、王朝区分によらない文学史の叙述を試みている。しかし、その細目においては、やはり王朝を単位とした文学群のカテゴライズから完全に脱却しきれてはおらず、中国文学史における王朝区分の根強さを痛感させる。

(10) 『劉禹錫集箋証』巻一九。

(11) 吉澤誠一郎『愛国主義の創成 ナショナリズムから近代中国をみる』(世界歴史選書、岩波書店、二〇〇三年) 第三章「中国の一体性を追求する」、平野聡『大清帝国と中華の混迷』(興亡の世界史第17巻、講談社、二〇〇七年) 序章「「東アジア」を疑う」を参照。

(12) 「元」とはクビライが一二七一年に制定した国号だが、我々が「元朝」と言うとき、一般にそこにはチンギス即位(一二〇六年) 以来の時期も含まれる。ここではチンギス以来の時期を含む謂いとして、「蒙元」或いは「モンゴル」と呼ぶ。また、その終点については、天元帝トクズ・テムルがイェスデルに殺された一三八八年をひとまず終焉とする(杉山正明『モンゴル帝国と長いその後』〔興亡の世界史第09巻、講談社、二〇〇八年〕、二九四頁)。

(13) 黄震雲『遼代文学史』(長春出版社、二〇一〇年)「前言」、一頁。

(14) 島田正郎『契丹国 ── 遊牧の民キタイの王朝』(東方選書、東方書店、二〇一四年新装版＊初版は一九九三年) II「キタイ(契丹・遼) 国の制度と社会」、七二頁。

(15) 島田前掲書「あとがき」、二〇九頁。
(16) 島田正郎『遼朝史の研究』(東洋法史論集第二、創文社、一九七九年)第一章「遼の社会と文化」、五八頁。
(17) 宮脇淳子『モンゴルの歴史』(刀水歴史全書五九、刀水書房、二〇〇二年)第六章「モンゴル帝国の後裔たち」、一二六頁。
(18) 岡田英弘『岡田英弘著作集Ⅳ』(藤原書店、二〇一四年)第Ⅱ部5「宋濂らの『元史』」、二七三頁。
(19) なお、孫進己・孫泓『契丹民族史』(中国古代北方民族史叢書、広西師範大学出版社、二〇一〇年)「前言」に「中国国内の関連諸本は契丹史を中華民族史の一部として叙述するが、国外の研究者は契丹族を中国の異民族として叙述する(国内諸書都是把契丹史作為中華民族史的一部分来写，而国外学者却把契丹族作為中国的異族来写)」(三頁)とあるように、非漢族王朝の捉え方については、学問を超えた要因も有るようである。
(20) 宮脇前掲書、一二五～六頁。
(21) 鄧紹基［主編］『元代文学史』(人民文学出版社、一九九一年)第一章「元代文学的若干歴史文化背景」、原文は「由於種種原因，元王朝統治中国的時間不長，如果自蒙古王朝滅金，統一北方算起，到恵宗妥歓帖木児至正二十八年(1368)，明兵攻下大都，元室北遷，統一的元王朝宣告滅亡為止，計有一百三十四年；如果自世祖忽必烈至元十三年(1276)元軍占領臨安，宋室投降，元王朝統一全国算起，只有九十二年。按照文学発展的実際情況，元代文学史的起訖時間大致可定為従蒙古王朝滅金到統一的元王朝滅亡。」(一頁)。
(22) 羅斯寧・彭玉平［編］『宋遼金元文学史』(『中国文学通史』之三、中山大学出版社、一九九九年)下編第一章「元代文学概説」、二七九頁。
(23) 顧嗣立『寒庁詩話』(王夫之等［編］『清詩話』収、上海古籍出版社、一九六三年)。
(24) 宮紀子『モンゴル時代の出版文化』(名古屋大学出版会、二〇〇六年)第4章「モンゴルが遺した「翻訳」言語」、二〇二～三頁。
(25) このことについて、同じく非漢族王朝である遼については、前掲『遼代文学史』に「遼代的北語詩」の節が設けられ、また章培恒・駱玉明［主編］『中国文学史新著(増訂本第二版)』(復旦大学出版社、二〇一一年)にも、契丹が独

自の言語と文字を持っていたことに注意しつつ、「諸々の条件から、我々がここで研究対象とするのは漢語を以て書かれたものと、もとは契丹語で作られたが、漢語に翻訳されたものに限る（限於種種条件、我們在這裏作為研究対象的只能是以漢語写的文学作品和個別雖以契丹語創作、但却已訳成漢文的作品）」（中冊、三四四頁）と述べられるなど、言語状況に対する考慮が見られる。

(26) 古松崇志「脩端「辯遼宋金正統」をめぐって――元代における『遼史』『金史』『宋史』三史編纂の過程――」（『東方学報』京都第七五冊、二〇〇三年）。

(27) 拙稿「「現象」としての『夷堅志』――金元研究の視座からみた『夷堅志』研究の可能性」（伊原弘・静永健［主編］『南宋の隠れたベストセラー『夷堅志』の世界』、アジア遊学一八一、勉誠出版、二〇一五年）。

(28) 胡伝志『宋金文学的交融与演進』（国家哲学社会科学成果文庫、北京大学出版社、二〇一三年）「自序」に「一〇世紀に入ると、遼、宋、西夏の三つの政権が天下を三分した。西夏は国力が弱く、伝存する文献も少ないため、人々の目には、この三国鼎立はあたかも遼宋の二国対立のように映った。金王朝は白山黒水の東北に興り、いきおい遼、宋を滅ぼし、南宋と領土を二分して統治し、あたかも中国史上の第二次南北朝時期と言うべき状況となった（進入１０世紀，遼、宋、西夏三箇政権三分天下，由於西夏国力較弱，伝世文献有限，在人們的眼中，這種三国鼎立近似遼宋双方対立。金王朝遠在白山黒水的東北崛起，迅速滅遼逐宋，与南宋分疆而治，儼然成了中国歴史上第二次南北朝時期）」（一頁）とある。